

へんくつ 一代 三好 徹



木
三
好
徹

松
原

白
蓮



へんぐつー代^{いちだい}

みよし とおる
三好 徹

© Toru Miyoshi 1993

1993年12月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——信毎書籍印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185559-X

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

へんくつ一代

三好 徹

講談社

目次

へんくつ一代

7

破れかぶれ

57

したい放題

105

炎の如く

153

赤い巨人

199

獅子吼

245

あとがき

297

解説

郷原宏

299

へんくつ一代

へんくつ一代

アメリカ密航に失敗した吉田松陰^{しやういん}が、萩城下の野山獄^{やまごく}に入れられたのは、安政元年十月二十四日であった。国禁を破った松陰に対して幕府が下した処分は「自宅蟄居^{ちつきよ}」という思いのほか軽いものだったが、長州藩の方で幕府を恐れ、獄に入れたのである。名目上は、藩が強制的に投獄したのではなく、家族からの願いによって獄に預かった、ということになっている。だから入獄中の食費などは、藩の負担ではなく、家族が出すという仕組である。

獄舎は南北に分かれ、それぞれ六室の独房があり、その中間に細長い庭がある。各房は格子のはまった一間の間口で、広さは約四畳ほどである。松陰は北獄舎の西の端^はしに入れられた。

このとき囚人の数は十一名だった。松陰が入って十二名、獄舎はこれでいっぱいになったことになる。十一名のうち、もっとも獄歴の長いのは、すでに四十九年も入れられている大深虎之允七十六歳である。ついで十九年の弘中勝之進四十八歳。この二人はかつて人を殺めた犯罪歴をもっているが、他の九名はそのような大それた罪を犯したものでなかった。

松陰にそのことがわかってきたのは、入獄してしばらくたってからのことで、最初のうちは、いずれも何らかの罪を犯して投獄されたのだと思っていた。

松陰はすでに江戸の伝馬町で獄生活を体験している。入獄したときは、その体験に従って挨拶した。といっても、野山獄は江戸のそれとは違う。江戸では牢名主がいて、その下役に首根ツ子を床に押しつけられ、どういう容疑で投獄されたかなどを申立てるのだが、野山獄においては、牢名主も下役もない。また、各人が独房ということもあって、松陰は、自分の姓名を名乗って頭を下げただけだった。

大深は目をとじたままかすかにうなずいてみせただけである。弘中は好奇心の強い性質らしく、

「吉田寅次郎とらじろうというと、下田でメリケンの船に乗りこもうとしたという男か」

と嬉しげに声を挙げた。

他のものも新入りの松陰に興味をもったようだった。もっとも獄歴の短いもので四年である。

外界に遮断しゃだんされて暮しているだけに、二十五歳の若者の入獄に誰もが興奮したのだ。

一人だけ、松陰の丁重ていちょうな挨拶にも背を向け、

「ふん」

と鼻をならすようにして無視したものがいた。あとで獄吏の新右衛門に聞いたところでは、富永弥兵衛三十四歳という武士であった。十一名のなかではもっとも若い。そして、弥兵衛の房は、松陰の真向いである。

よく見ると、弥兵衛はあばた面づらで右眼がつぶれている。どうやら天然痘のせいだった。松陰は、富永弥兵衛の名前を前に聞いたことがあった。松陰は天保十一年、彼が十一歳のときに藩

公の御前で「武教全書」を講じておほめの言葉を賜^{たまわ}ったことがあった。松陰は五歳で吉田家の養子となり、養父大助の死によって家を継いだ。吉田家は山鹿流兵学師範として毛利家に仕^{つか}えていたから、この君前講義も、その務めを果たしたことになるが、その若さからして、異例のことだったことは間違いない。

その松陰十一歳の君前講義が行われるときまで、いまでいえば若さのレコードホルダーは、富永弥兵衛だった。弥兵衛は松陰より七年前の天保四年に、十三歳で「大学」の君前講義を立派にやってのけたという秀才であった。だから松陰も、その名前を聞き知っていたのである。

（あの富永殿がどうしてこんなところに）

と松陰は不思議に思った。

しかし、面と向ってたずねるわけにはいかない。松陰には、他人の身の上を詮索^{せんさく}するという性癖はなかったが、他の十人よりも、真向いの部屋にいて、ほとんど彼に背を向けているこの先輩囚にやはり関心をもたざるをえなかった。が、弥兵衛の方は、松陰をまったく黙殺し続けた。ほかの者にせがまれて、江戸の話や、密航に失敗したいきさつを話しているときも、弥兵衛は背を向けたままである。それどころか、松陰の声がひとりでに高くなりはじめると、

「うるさいぞ。静かにしろ」

といわんばかりに、格子を足で蹴^けってみせるのである。

「氣にするな。あれは性根^{しょうね}が海岸の松のようにねじ曲^まっているのだ」

と司獄の福川犀之助^{さいのすけ}がいった。

福川の説明によると、弥兵衛は藩公の前で講義した翌年に御小姓役に取り立てられた。これは長州藩においては、出世コースにのったことを意味する。

弥兵衛に不運が訪れたのは二十歳のときだった。父七郎右衛門が病死し、一家が天然痘にかかってしまった。妹のたつは両眼を失明し、弥兵衛も右眼がつぶれた。こうなると御小姓役には何かと支障がある。で、配膳方に移された。

弥兵衛は憤激した。御手廻頭に属し、藩公の身边に侍する仕事から、女子供のするような台所の仕事に回されたのである。まして、幼時から秀才の誉れの高かった当人にしてみれば、こんなのは一人前の武士の仕事ではないように思えたであらう。

その彼の満腔の不平不満につけこんで、同僚があることないことを言い触らした。弥兵衛はあらぬ罪をかぶせられて、見島に流罪となった。

富永家としては、当主が流罪になったからには、何とかして家名を保つ手段をこうじなければならぬ。そこで、弥兵衛を強引に隠居させ、親族の久富太三郎を養子に入れた。

間もなく、弥兵衛の冤罪は晴れた。ところが、親族たちは、弥兵衛を自由にさせておいたのは不安である。弥兵衛のことだから何を仕出かすか、何をいい出すか、わからない。親族連名で野山獄への借牢願を藩庁へ提出した。つまり、富永家として、弥兵衛を入獄させてほしい、と願ひ出したわけである。

藩庁はこれを許可した。弥兵衛は見島から萩に戻ると、その日のうちに野山獄につながれた。こういう目に遭わされれば、誰だってねじくれない方がおかしいのである。しかし、周囲のも

のは、そうは思わず、

「ああいう性質だから」

と弥兵衛の責任にする。そして、弥兵衛自身も、ますます偏屈へんくつになったのである。

獄内にあっても、口をきくものはいなかった。弥兵衛の方も、話しかけることはしない。唯一の例外は、高須久子という女性の囚人である。久子が何か話しかけると、短い応答をする。

久子は、松陰が入ったときは三十九歳で、獄歴は弥兵衛とほぼ同じである。久子にも、藩法を犯したという罪はない。親族からの借牢願によって入獄させられたという点において、弥兵衛と同じ境遇である。

久子が入ってきたとき、例によって弘中がたずねた。

「どうなされた？」

久子は悪びれたふうもなく、

「姦淫の咎とがによりまして借牢にございます」

と答えた。

「何と！」

弘中は思わず拳こぶしを握りしめた。

久子は寡婦かふであった。夫が死亡したあと、婚家にとどまっていたのだが、出入りの町人と通じてしまい、実家に戻された。実家としては、武家の面目にかけても久子を放っておくわけにはいかず、藩庁へ借牢願を提出したのだ。おそらく、死ぬまで野山獄で暮すことになるだろう。

久子はそんなことを淡々と語った。

この時代、三十九歳といえば、女としては老年扱いにされる年齢であるが、久子は年よりも若く見えた。また、女ツ気のない獄舎にあるということだけで、他の囚人たちにとっては、やはり特別な存在になった。

弥兵衛としても、他のものとは口をきかなくても、久子に対してだけは、偏屈ではいられたかったであろう。そのために、弥兵衛が弘中らに何かいうときは、久子を通じていうことになった。

それに、久子の場合、格子がはまっけていても、房に鍵をかけられていなかったもので、夜間を除いては自由に往来できた。松陰は、そうした獄内状況がわかってくると、ある日、久子を呼びとめ、

「この書物と手紙を富永殿にお手渡しただけまいか」と頼んだ。

2

弥兵衛は鏡というものを一度しか見たことがなかった。武士である以上、この時代の男が婦女子のようにその面貌を鏡に映うつしてみることがはしないが、それはあくまでも表向きのことであつて、家の中でも絶対に鏡を見ないというわけではないのである。城中に出仕するにさいしては、

月代やひげをそり、まげを整えなければならず、妻帯者ならば妻女に任せられるし、大身ならば郎党に命ずることもできるが、独り身の下級武士では、すべてを自分でしなければならぬ。どうしたって、鏡を必要とするのである。

弥兵衛の場合は、七郎右衛門の存命中は、母親がしてくれていた。が、父親の病死のちに一家が天然痘にかかり、弥兵衛自身も病欠した。そして治癒して再び出仕するようになったとき、母親はまだ病床にあり、弥兵衛は自分でひげをそり、まげを結わねばならなかった。そのため、鏡を用いざるをえなかった。

弥兵衛は鏡中の自分の顔を見て、

(うーむ！)

と思わず唸ってしまった。

手の触感で、顔面があばたになっていることはわかっていた。また、右眼の失明はもとより承知である。とはいえ、鏡面に映っている男の顔は、人間のものとは思われぬほどひどいのである。

だが、弥兵衛はさして気にしなかった。

役者は別として、男の値打ちは容貌と関係がない、と彼は思っている。じじつ、そうである。鏡面に映っている男は、魁偉というよりは怪異というにふさわしい顔になっているが、その内容、病気の前と後で変ったわけではない。和漢の学に通じ、筆をもてば誰もが感心するほどの能書家であり、武士としての鉄石心は余人にひけをとらないのである。しかし、その怪異さには